

ヨルダンからクロアチアへ

六月下旬から七月上旬にかけて、ヨルダンとクロアチアを旅した。

蠅川カンパニー『王女メディア』、初の中近東公演をヨルダンで、そして、劇団「解体社」のクロアチア国内三カ所巡演を見てきた。どちらも、異常とも思える、かつてない観客の反応に立ち会い、劇における観客の存在を改めて考えさせられた。



蠅川カンパニー『王女メディア』ジェラッシュ・ヨルダン
ヨルダンにもローマ時代の古代劇場が残されているのに驚く



(1)解体社「TOKYO GHETTO ララバイ」ズレイター・クロアチア
映画館を劇場に作り替え上演した。



(2)解体社「TOKYO GHETTO オルギア」ザグレブ・クロアチア
(ユーロカズ・フェスティバル)参加



(3)解体社「TOKYO GHETTO 消尽」プーラ・クロアチア
オペラハウスの巨大な舞台部分に客席も作り上演

首都アンマンから車で一時間程の所にあるローマ時代の遺跡、ジェラッシュの古代劇場で蠅川幸雄演出『王女メディア』は六月二十一日、二日の二回公演した。

日没後の午後八時開演。津軽三味線の音に合わせクロス十二人が登場すると、手拍子、足拍子で踊り出す若者が多く、石造りの野外劇場を埋めた三千人を越えた観客が騒然となった。メディア役の嵐徳三郎のセリフは、指笛、歓声で聞きとれないほどだった。

この場所での演劇の上演は初めてのこと、

大半の人々が演劇鑑賞初体験であったのだ。開演前は小ささが緊張感みだつた世界の二ナガワも、「世界は広い、未知の新しい演劇の領域を知った」と、驚きを示していた。

二日間の公演を見て、私は宿泊していたホテルを深夜一時過ぎチェックアウト。午前四時のフライトで、劇団「解体社」の公演を見るために、アムステルダム経由クロアチアのザグレブに向かった。

「解体社」は、93年の「アトラクタ・アート・フェスティバル」に参加の頃から、海外の多く

の演劇関係者に注目され、各国から公演を求められている劇団。

クロアチアでは首都ザグレブで行われた「ユーロカズ・フェスティバル」(六月二十九日、三十日)に参加の他、二カ所で公演した。

今年で十年目となるユーロカズのプログラムには、ヤン・ファールブル、ロバート・ウィルソンも参加しており、世界的な前衛演劇祭であることがわかる。

解体社は昨年の東京演劇祭でも公演した作品「TOKYO GHETTO」に参加した。

劇の冒頭、男優が女優の背中と太ももを平手で打ち続けるシーンがある。しばらくして観客が騒ぎ出す。何人かが「ストップ!」と大声を出す。最前列で見えていた青年が舞台に近寄り、男優を引きずり降りそうとする。赤く腫れ上がった女優の背、「ドクター!」と叫ぶ者。四百人余の劇場の中は異常な光景となった。

演出の清水信臣は、観客が直接行動に出たのは初めての事ではあるが、予想された反応であると言う。隠蔽された差別、暴力を演劇行為によって露出、提出することを意図する

この作品は、日本国内でもさまざまな議論があったからだ。「TOKYO GHETTO」は別のバージョンで、ザグレブの近郊の町ズレイターで一日、また七月三日、アドリア海沿いのリゾート地プーラで公演し、クロアチア巡演を終了した。

この作品は、日本国内でもさまざまな議論があったからだ。「TOKYO GHETTO」は別のバージョンで、ザグレブの近郊の町ズレイターで一日、また七月三日、アドリア海沿いのリゾート地プーラで公演し、クロアチア巡演を終了した。このため、私は午前四時三十分プーラ発の列車に乗り、ザグレブへの約七時間の旅。途中、列車はスロベニア国内を経由するの、二度のバスポート・チェックで叩き起こされるが、到着まで眠り続けた。